
雨粒色

凧沓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨粒色

【Nコード】

N8954C

【作者名】

凧辻

【あらすじ】

親友の涼平は何でも出来る。僕は、人から認められた「絵」も涼平には勝てない。嫉妬、憎しみ、悲しみ、友情、全て合わさって僕の心には「靄」が生まれた。

第1話：湿気の教室

雨粒の一つ一つに意味を込めるとまでは言わないけれど、自分が把握出来る全ての範囲に意味を持たせるようにしろ。

学校の美術室で僕は言葉を反芻していた。

この言葉は自分の中でうまく消化出来ない。

僕は雨粒一つ一つに意味を持たせて、他は雑に意味を持たせず描いた絵など一枚もない。

じめつとした美術室で僕は窓の外を見つめた。

雨は上がったのだろうか？先程まで降り続いていた雨音が耳に届いていないのに気付く。

湿気で窓は曇り、水滴が線になってスーッと滑り落ちる。

湿気が溜まるこの部屋は美術室に向いていないと来るたびに思う。

冷えきった窓枠に手をかけ、カラカラと小気味良い音と共に窓を開く。

外は澄み切った青空とまではいかないが、雲の切れ間から綺麗な青が覗いていた。

冷たい風が美術室へ流れ込む。

「さむっ」

入口から聞き慣れた声があった。

振り返ると眠たそうに瞼を擦る笹木涼平ササキリョウヘイの姿があった。

「窓閉めて、寒い」

その言葉に開けたばかりの窓を閉める。

中の湿った空気は全て出て行かないにしろ、少しは緩和されたはず。

「その窓本当小さいな」 確かに。

他の教室に付いている窓の半分の大きさ、しかも窓はその一つだけの悲しいものだ。

「小さいよね」

同意を持って返す。

涼平とは幼馴染みで、園、小、中、高の今までずっと一緒に、クラスは違えど昔から変わらぬ仲が続いていた。

涼平は僕と違って優秀だ。勉強も運動も人並みにしか出来ない僕と違って、涼平は何事も難無くこなしてしまう。

そこに努力の影があれば悲観的にならなくて済むのだけど、それがどこにも見当たらない。

学校が終わり、家に帰っても涼平のやることは決まっている。

家に帰り、誰も居ないことを確認して、冷蔵庫の中身を確認して、預金を確認して、そして戸締まりをして家を出る。

それだけだ。

手に取るように分かる涼平の行動。学校に居るときの涼平の行動は余り知らないけれど、家に帰った直後の涼平の行動は分かる。

「帰ろうぜー」

あくびをひとつして涼平は言った。

片付けは面倒なので、涼平にも手伝ってもらった。

涼平は慣れた手付きで画材のひとつひとつを片付けていった。

僕に絵を覚えてくれたのは涼平だった。

涼平は父親に教えてもらったらしいのだが、事故で父親が死んでしまい、それ以来絵が書けなくなってしまったと涼平は言っていた。

キャンバスを丁寧に運び出し、ふたつ隣の教室に持って行く。

備品置き場と化した教室。元が何の教室かも知らない古いところ。

それでも美術室とは違い換気もしっかり出来て、作品の保存や管理の場に重宝していた。

「やっぱり樹ツツキは才能あるな、色が透き通って繊細で綺麗だよ」

涼平が父親から習った油絵は写真のように色の感じが美しかったいつか見せてもらった海を描いた絵は言葉を失った。

コバルトブルー、ウルトラマリン、セルリアンブルー、いくつもの青色を塗り重ねたあの絵は今も僕の心に深く根付いている。

「ありがとう」

涼平が嫌味を言わないことは知っている。

でも嫌味に聞こえてしまうのは、涼平の努力を知らないから…。涼平が自分よりまだまだ高い位置に居るからだと思う。

自分が好んで描いている海の絵も、あのとき見た涼平の絵には到底及ばない。あの綺麗な青色は涼平独自の色。

そんな独自の色を持っている涼平に

「色」について褒められても自分の色が無い僕には、嫌味にしか聞こえない。

キャンバスに描かれた自分の幼稚な海は差を強く感じさせた。

「帰ろっか？」

道具一式を捨てるように置くと、僕と涼平は教室を後にした。

肩から鞆を下げ、だるそうに廊下を歩く。

涼平は隣りでまだまだ眠たそうで、あくびをまたひとつした。

玄関で靴を履き替え外に出る。雨が枯れた空は、青色が濃さをまわしていた。

灰色の重たい雲は行き場を失い、そろそろ消えてしまいそうに空を漂っていた。

第2話：霧

濡れた帰り道はアスファルトの匂いで一杯だった。

そう言えば…と思い出したが余りにも汚く醜い話だったので口に出すのは止めておいた。

それに涼平の泣きそうな顔は見たくないから。

涼平の泣き顔が見たくないから？汚く醜い話？そう思った時点で僕は最低だ。

分かっているながら言葉にしようとした。

僕は涼平を傷付けたいのかも知れない。

「じゃあね」

と別れた五分後。

涼平はいつもと同じように家にやって来た。

玄関を入り、目の前にある階段を上り、一番奥の部屋、そこが僕の部屋だ。

何をするわけでもない。一緒の時間を過ごすだけ。一緒に漫画を読んだり、ゲームをしたり、二人が別々のことをしたりと、今迄一緒に過ごした時間はかけがえのないものだ。

学校が終わり帰宅すると六時頃で、それから涼平は九時頃まで僕と時間を共にする。

途中、夕食が部屋に運ばれて来た。

「涼平くん今日も食べて行くでしょう？」

母は分かりきっている問いを涼平に投げ掛ける。

「いつも、すいません」

涼平は申し訳無さそうに頭を下げた。

「いいのよ」「優しく口にして、

「早く食べなさい」と急かし部屋を出て行った。

いつものやりとり。

僕は慣れてしまった。

母の言葉も、涼平の申し訳無さそうな作戦も…。
…このやり取りはすごく苛々する。

夕食を食べ終え涼平は再び漫画を読み始めた。

僕はそれが当たり前のように過ごした。

いつからだろう？

いつから涼平は家に入り浸るように…、いつから母は涼平を客人として迎えるようになったのだろうか？

いつから？

あの日…、あの時あの場所のあの人のあの姿…。

分かってる。

ちゃんと分かっている。

涼平が僕を頼る理由も、涼平が家に入り浸る理由も…。

分かってる。

分かってるけど…。

涼平が悪いわけじゃない。

分かっているよ。

やり場の無い想いはだんだん僕の視界を閉ざしていくのが分かる。
茶碗を片手にため息を吐き、顔を上げる。

疲れているのだと思った。

箸を持ったまま目を擦るが、僕の視界の異常は消えなかった。

何これ？煙？霧？靄？

「うわっ…」

僕の奥から出た声に涼平は反応した。

「どうした？」

漫画を開いたまま、不思議そうな顔でこっちを見ている。

「何か…、視界が暗いと言うか黒いと言うか…、ごめん何でも無い
疲れてるみたい」

「…そうか」

涼平は勘が良いから何か感じたかも知れない。とにかくこれは涼平には見えていない様だ。

視界を塞ぐように現れた黒い霧は、吸い込んだ空気と共に胸の中に広がり、吐き出した息に混じって僕を暗く包んでいく。

怒りなのか悲しみなのか不安なのか嫉妬なのか友情なのか、まとまることの無い感情に霧は生まれたようだ。

一通り漫画を読み終えると涼平はいつもより早く帰った。

「大丈夫か？」と一言残して帰った。

霧は鏡を通して僕の目にハッキリ映った。

霧は蛇のようで頭で一回りとぐるを巻くと左目の辺りにだらりと垂れている。

重さは無い、体調が悪いわけでは無い。気分は前から悪いし、何がおかしい訳ではない。

ただそれはひんやりと冷たく頭が覚める感じがした。

肺の中にはまだまだ霧は渦巻いていた。

霧は僕の全身を薄い黒で覆っていた。

まるで不幸をみずから被っているようで情けなくなった。

朝起きると真っ先に洗面所に向かった。

昨日はあれからすんなり眠った。やはり疲れていたらしい。

一階に降り、鏡を前にして目を疑った。

「…濃くなってる」

全体的に黒が増していた。

昨日はぼんやりと霞れて見えていたのに、今は姿を曖昧にするほどに濃くなっていた。

家から出ると太陽がムカツクほどに眩しかった。

昨日降った雨はどこにも残っておらず、あの雨は僕の心で降った雨だと考えた。

あの帰り道、雨は止み青空が覗いたはずなのに、今僕の心は青空

どころか雨すらも降っていない。何も無い。真っ暗なだけ景色すら無い。黒い霧だ。

何故だろう？昨日のまとまらない想いが一つになっていくのが分かる。

僕は涼平を憎くて憎くてしょうがない。

第3話：雨のち雨

こんなに太陽が眩しいのに心に光は一切差し込まない。
心は靄でいっぱいだ。

学校に向かう道の途中、いつも涼平と待ち合わせている何も無い道の途中。

入り組んだ道、ちょっとだけ坂になっている道の一步手前。
待ち合わせの場所。

早く家を出たせいかわ、涼平の姿は無かった。

僕は足を止めること無く進んだ。

今、涼平に会っても僕は何も出来ない。

殴りたいかも知れない、それ以上に殺したいかも知れない、けれど涼平を前にすると躊躇うのが自分でも分かっていた。

憎い?と思う。

自信は無いけど涼平を嫌いになろうとしている。

それが、靄を纏う前か靄を纏った後かはイマイチ分からないけど

...

考えながら歩いていると学校を目前にしていた。

靴を履き替え中に入るが、生徒の姿がいつも以上に少ない。

時計を見ると、まだ七時になったばかりで、一時間ばかり早く登校したらしい。

頭が冴えていると思っていたのに、とんだ馬鹿さに笑えた。

一時間何をしよう?と考えるより足が動いた。

美術室。

僕にはそこしかないから。

玄関から体育館横を通り美術室に向かう。

途中、窓から見える空の雲行きが怪しくなっていた。

今にも降り出しそうな雲色に

「帰りは雨かな?」と呟いた。

今度は足を止めて窓の外を見つめた。

「帰りは雨かな？」

「雨」

呟いて淋しくなる。

窓の外に広がる中庭の景色も、今にも降り出しそうな雲色も、誰も居ない廊下も、後数十歩歩けば辿り付く美術室も、全て涼平が隣りに居ないと成り立たない。

僕はこの世界の主人公じゃないんだ。

靄が一層濃くなった気がした。

美術室のドアを開くと独特の油の匂いがした。

慣れてしまった油の匂いは特別な証。

学校は元々油絵の教育など一切行っていない。

たまたま、僕が書いた油絵を校長か誰かが目にし、特別に学校的美術室を使って作品作りをして良いと言われたのだ。

嬉しかった。

しかし、割り当てられた部屋は美術室とは名ばかりの、牢獄のような汚い部屋だった。

それでも僕は嬉しかった。

涼平を頭一つ分ぐらい追い抜いた気がしたから…。特別待遇してもらい、特別に部屋まで用意してもらい、特別に美術の先生が絵を教えてくれる。

それが涼平を上回っている証だと、そう思っていたから。

けれど涼平の絵を見たとき全てが崩れ去った。

あの絵…、あの海を描いたあれは、僕を幼稚で自惚れた存在だと自覚させた。

サツと竹が擦れるような音がした。外では雨が降り出していた。美術室の窓から見る今日の雨は心に響いた。

絵を描こうと思った。

心に響いたこの瞬間を絵に残したいと思った。

絵を描けばきっと涼平への憎しみも黒い靄も何もかもが消える。

きつと今まで同じ日々が続き、僕らはずっと友達でいれるはず…。

僕は心から願って筆を握った。

けれど、それを黒い靄が許さなかった。

僕の思い描く雨粒色は繊細で透明で…、なのに僕がパレットに出した絵の具は黒色。

自分でも何がどうなっているのか分からない。

使い続けている同じメーカーの絵の具。

左から順番に絵の具の名前も言える。

間違っはうがない。

僕は左から十二番目のターコイズブルーをとったはず…、なのに何で僕の手には一番右端にあるはずの絵の具を持っているのだろうか？

容器の中にある絵の具に手を伸ばそうとしたが思うように体が動かない。

吐く息が熱い、熱があるのか体中が汗ばむ、視界が霞む、朦朧とする意識の中、僕は筆を握り締めた。

僕の右手には黒い靄が絡み付いて、筆を握らせていた。

立ち上がるうとしたがやはり体は動かない。

右手も左手も足も口も声さえも出せないし動かせない。

朦朧とする意識の中で微かに目を開いているので精一杯だ。

目の前に置かれた真っ白なキャンバスに助けてと願いつづけた。

第4話：冷蔵庫の中身

だけどそんな願いも虚しく、僕の右手はキャンバスに黒を載せた。止めて…止めて…止めてよ…止めてください…止め…て…止めて…止めて…止め…！

僕の右手は早さを増し、ガリガリと激しく音を立てキャンバスを黒く染めていった。

パレットは黒で埋め尽くされ、黒の絵の具はチューブを絞り出した。一滴も出なかった。

筆はボロボロになり、抜けた毛がキャンバスの黒に混じっていた。それでも僕の右手は筆を握り続けた。

涙が溢れる。

頬を伝い顎から零れ落ちる。

助けて…助けて涼平。

ガラガラとドアが開く音がした。

「樹？」

涼平の声に安堵して、振り返ることも出来ずに僕は気を失った。

目を覚ますと床で眠っていた。

腹には毛布がかけられていた。

見慣れない天井、でも独特の匂いと小さな窓から美術室だと分かる。

部屋は真っ暗でよく見えない。

今何時だろう？涼平？

上体を起こし辺りを見回す。

涼平は居ない。

あの忌まわしい黒いキャンバスも消えていた。

静まり返った美術室。

校内全ての時が止まったように静かだ。

窓から月明りが注ぐ。

雨は上がったのだろうか？立ち上がり窓の外に目をやる。

外には水溜まりがあるものの雨は降っておらず、雲の影すら見えない綺麗な満月だった。

ガラガラと扉が開く。

「おっ、起きたか？」

「…涼平」

目を合わすことが出来ない。…怖い。

「お前いきなり倒れるからビックリしたぜ」

「…」

言わなきゃ、自分の汚い感情を…。憎くて悔しくてしょうがなかったって伝えなきゃ…。

「悪いな、今日保健室開いて無くてさ、一応毛布だけ拝借して来たけど…」

「涼平…」

涼平は僕の隣りに並ぶと窓の外に目を移した。

「それにしても今日は月が綺麗だな…、見てみ、満月だぜ」

「涼平聞いて…」

涼平はゆっくり胡座をかいた。

僕は見下ろす形で言葉を続けた。

「涼平あのね…」

「お前…俺のこと憎いのか？」

見透されている。

敵わないなあ…。

僕はそれが嬉しくて、口元が緩んでしまう。

「俺が憎いなら、殺したいなら殺せばいい。けどな、絵が書けなくなるぞ」

僕は黙って聞いていた。

「俺は親父が事故で死んだとき、まだ絵が書けていたんだ」

涼平の隣りに腰を下ろし

「続けて」と囁いた。

「俺が絵を書けなくなったのは、母親を殺してからだ」

涼平は母親を殺した。

それは罪だけど、しょうがない罪で、涼平は一切悪くない。

生きることを自ら止めた涼平の母親が悪いのだ。

涼平の母は、涼平の父が死んでしまったことから生きる気力を失い、自ら薬を多量に飲み、冷蔵庫に入り死んでいった。

涼平は学校から帰るなり、冷蔵庫に入る母の最期を見ている。

でも止めなかった。

それを涼平は殺したと考えている。

「俺は、あの人が冷蔵庫に入ったとき止めなかったのを後悔していない。残酷かもしれないけど、あの人が自ら望んだことだし、天国で父と会ってればそれで幸せだろうと思ったんだ」

「じゃあ、何を後悔してるの？」

涼平は少し頭を上げた。

宙を目で追い、何かを掴まえたように真剣な眼差しで答えた。

「父を憎んだこと」

月の光が涼平の前髪を照らしている。

僕は全て分かってしまった。

涼平は今の言葉で、僕が全て分かったと分かっているはずなのに、それでも言葉を続けた。

「俺は、勝手に死んで、母を悲しませてボロボロにした父が許せなかった。でも俺がああとき父を憎まなかったら、母は死ななくて、絵も描き続けることが出来たかもしれない」

声がうわずっている。

聞いてもらえない。

「無理して話さなくていいよ。つらいなら止めてもいいよ。分かっているから、ちゃんと分かっているから……」

涼平の泣き顔は二度目だ。一度目は最初にこの話を聞いたとき…。

涼平は涙を手で拭いながら続けた。

僕はただ隣りで聞き続けた。

月は僕らを見守ってくれていた。

第5話：睡眠不足

涼平は眠ってしまった。

こうして涼平の寝顔を見ていると、まだまだ子供なんだろう。

あんなに綺麗な絵が書いても、勉強が出来ても、それは僕らの小さい世界での出来事。

僕は筆を取った。

毛先がボロボロになった筆には、朝の黒がこびりついていていた。

黒く埋め尽くされたキャンバスは涼平が捨ててくれたのだろうか？ここに無いということはそういうことだろう。

僕はまだ絵が描けるだろうか？

静かにキャンバスを手に取り床に座った。

胡座をかいてキャンバスを寝かせ筆を取る。

描く絵は今。

今この時を描きたい。

僕はキャンバスに色を載せた。

すーっと染み込む綺麗な茶色。

下書きもしないでただ色を付けていく。

「描ける」

「描けるよ」

僕はキャンバスに涙を落とさないように描き続けた。

次の日、僕らは学校が始まると同時に逃げ出した。

朝は先生がうるついでに、その後生徒達がわらわらと押しかけて来る。

人の網を潜り抜けることも出来たが、うっかり友達に会うと言いつつに困ってしまう。

揚句の果てに学校に逆戻りなど冗談では無い。
睡眠不足の体は、かなりバランスが悪く、立っているのがやっとだ。

僕等はホームルームの時間を見計らって学校から逃げ出した。
悪い事をしているのに、つつい笑い込みが零れる。

涼平と笑い合いながら家路を急いだ。

涼平といつもの場所で別れ、僕は親への言い訳を考えた。

正直に話しても良いのだが、今の脳ではうまく説明出来ない気がした。

考えても考えても言い訳の理由は思い浮かばず、最終的には家の前で思考停止状態で突っ立っていた。

あー、もう面倒臭い、適当に言っ、その場を凌げればそれで良いのに…。

取りあえず寝よう。

言い訳は起きてからすれば良いや。

玄関を開けると、母がいつもの感じで出迎えてくれた。

「涼平くんの家泊まるなら先に言いなさいよね…、今日学校休むんでしょ？ さっさと着替えて寝なさい」

そう言っ母は奥へと消えて行った。

状況を飲み込めずに部屋に戻ると、インターホンの音が鳴った。

窓から玄関を覗くと、涼平と涼平の母親らしき人が立っていた。

涼平の母親は死んだはず。

でも涼平の隣に居るその人は、涼平の母親にそっくりだった。

数える程しか会ったことは無かったが、僕の覚えている涼平の母親は、今玄関前に立っているその人だった。

僕の視線に気付いた涼平はひらひらと僕に手を振った。

それを見た涼平の母が軽く頭を下げた。

そのうち玄関は開き、二人は中に入って来た。

直ぐさま涼平を部屋に招き入れ話を聞いた。

「ビックリした？」

あつげらんとした対応、僕が一人騒いでいるのが馬鹿みたいだ。

「あの人は母親の双子の妹で、おばさんというものだ」

涼平は説明口調で淡々と続けた。

「昨日のうちに、おばさんに電話して、樹の家に電話してもらおうに言っておいたんだ」

なるほど…。

「おばさんは全て知ってるんだ…」

僕は涼平の言う

「全て」とは、どこからどこまでを指すのかイマイチ分からなかった。

「おばさんは冷蔵庫に入ってる母親を見て、泣いてたよ…、すごく泣いてた…、同じ顔をしてるもんだから母親が泣いてるもんだと勘違いしたよ。」

涼平はベッドに横になりながら続けた。

「おばさんは仕方ないと言ったんだ。父親が死んで、父親を恨んで、母親が冷蔵庫に入り、自分を恨んだことを…、だから涼平は悪くないと…、だから今日から涼平の母親になるからって、おばさんは言ったんだ」

事態が飲み込め無い。

脳が停止寸前だからだろうか？

第6話：ねぼすけ

いつから涼平は、母さん、父さんと呼ばなくなってしまったのだらう？

いつの間に涼平の母親は死んでしまったのだらう？

何で僕は気付いてやれなかったのだらう？

沢山の疑問が浮かんでは消え、浮かんでは消える。

と言うか、涼平は何で人のベッドで寝ているのか？

それすらも分からないし考えられない。

とにかく…。

「涼平もつと奥行って」

制服のままの涼平を奥へと押しやり、自分も着替えることすら忘れベッドに入った。

「樹ー、そろそろ起きようぜ」

そう聞こえたのは空耳では無かったようだ。

目を開くと涼平の姿は無かった。

起き上がり、首を回しながら脳にスイッチを入れる。

ぼんやりと部屋の中を眺め、今の時間と窓からの光を確認する。

帰ったのかな？

捨てられた鞆や靴下、すぐに寝てしまったのか…。

立ち上がり一階の母の元に向かう。

階段を下り、台所に向かうと母は冷蔵庫を漁っていた。

僕に気付くと呆れた顔をして息を吐いた。

「ねぼすけ、涼平君は昼過ぎに帰ったわよ、あんた起こしても起きないからって…」

悪いことしたなあ。

涼平も、もつと強く起こしてくれれば良かったのに。

「…おばさんは何か言ってた？」

言い慣れていない言葉、まだあの人と話たことも無いのに、勝手におばさんと呼んで知り合いのように振る舞う…不自然だ。

「あんたの事、褒めまくってたよ。常識のある礼儀正しいきちつとした良い子だってさ…、まあ常識のある子は、学校サボって夕方近くまで寝ないけどね」

母は皮肉混じりに言うつと、エプロンを付け戦闘体制に入った。

全てが申し訳なく思えてきた。

きつと涼平の変化には気付いていたはずなのに、何も出来なかったこと、何の支えにもなつてやれて無かったことが悔しくて悲しくて堪らない。

涼平が母さん、父さんと呼ばなくなつたのは、きつと存在を遠くに感じているから…、もう昔のことのように、思い出のように思っているから。

涼平が家に来るのは一人が嫌だから、それと母親を少しでも感じたいから…、だってもう涼平は包丁が刻む音も、エプロン姿の背中も、たわいもない会話も、全て過去になつてしまった。

それなのに僕は…。

「ごめんね。何も出来なくて、何の支えにもなれなくて、涼平が悲しんで、苦しんでいるときに、一緒に泣いてあげられなくて、ごめん」

今更。

でも伝えたかった。

電話だと泣いてしまっただからメールでそれを伝えた。

送信を完了し、部屋を出ようとしたら電話がなつた。

着信音から涼平だと直ぐに分かつた。

「もしもし」

「謝るな！ 何も出来なくて、何の支えにもなつて無かつたと、どうして樹に分かる？ 俺は樹に特別何かしてもらおうとか考えてない。一緒に帰って、一緒に笑って、俺は一緒の時間を過ごすことで凄く支えになる。結果的に樹の家で過ごすことが多くなって、晩飯とか頂くことが増えて特別何かしてもらつてたけれど、俺は特別に何かしてもらつたからとかじゃなくて、支えは樹にしかねないし、何か出来るのも樹だけだと思ってる。だから…謝るな」
荒々しい口調が最後には途切れそうになる程小さく泣きそうに聞こえた。

「…ごめん」

「だから謝るなつて…、それよりどうすんの？」

僕はベッドに座り質問の意味を考えた。

「えっ…？ん？何のこと？」

「あの絵のことだよ」

あの絵…、どの絵のことを言っているのだろうか？

第7話：あのこのどの絵

「あの絵とは？」

「あの絵は、あの絵だ」

酔っ払いのおっさんか？分かりにくいしハッキリ言えばいいのに…、何で濁すんだろう？

「あの絵は俺が思っている以上に人を引き付けるはずだ。今だからしか描けない、絵を描いている人にしか伝わらないかも知れないが、あの絵は大切だ、あの絵はもう二度と描けない、描いちゃいけない絵なんだ」

描いちゃいけない絵。

それから涼平は電話の途中で眠ってしまったようだ。

「もしもし、おーい涼平」

呼びかけても返事がないただの屍のようだ。

そう頭の中で唱えて僕も意識が薄れるのを、やんわり感じながら、やんわり感じながら……。

昨日はあまり思い出せない。

寝てばかりの実に充実した時間の使い方をしたからだろうか？

でも大切と感じている部分、想いはしっかりと覚えている。

ベッドの上で枕を抱きながら、ぼんやり窓の外を眺めた。

雨か…。

今日が始まる朝一番に雨が降っていると、色々と削がれて憂鬱なスタートを切ることになる。

けれども僕は雨が好きだ。

この雨の中、憂鬱になっっていないのは僕だけかも知れない。

階段を下りながら考えた。

毎年秋頃、県立美術館で盛大な美術展が行われる。

僕は毎年それに作品を出展している。

今回もその為に絵を描いていたのだが、上手く描けない。

しかも、絵を教えてくれている先生にも絵を批難され自信を無くしていた。

けれど、涼平は当たり前のように過ごした。

自分が絵を描くことが出来ないのに、出展する絵や僕の事ばかり気にかけて…。

もう涼平は絵が描けない。絵が描けないんだ。

玄関前を通り過ぎ洗面所に向かう。

涼平は絵が描けない。

何て苦しいんだろう？何て悲しいんだろう？どうして涼平は笑ってられるんだろう？

耳を澄ませば聞こえる雨の遮るような繊細な音。

その一つ一つが溢れ出して、なのに涼平は髪を乾かすこともしないんだね。

雨が大地に辿り着くのを一秒でも早めたいのか知らないけれど、

僕はそんな涼平を放って置いたんだね。

涼平がびしょ濡れになっていても傘を貸すこともなく、でも自分が雨に晒されそうになると涼平に傘を開いてもらうんだね。

僕は改めて最低だな。

でも涼平は僕にしか支えることは出来ないと言ってくれた。

僕は涼平に何をしてやれるんだろう？

第8話：雨音

鏡に映った自分の姿に黒い靄は無かった。

驚くことはない。

むしろ当然、当たり前と言つか、無くなっていないと僕の涼平に
対する気持ちが嘘になる。

それに涼平を想つての心の色は今までにない程に澄み切っていた。

「いつてきます」

雨は勢いを増していた。

家に居るときに聞いた砂を零したような音など微塵も残っておらず、耳には親の返事も聞こえないほどに荒れた雨の音だけが延々と聞こえた。

傘を開くと重い雨粒がズシリと手に響くのを感じる。

玄関を出て道路は川のように流れがあった。

洪水になるのではないのか？と思うぐらいに水の流れに勢いはあった。

涼平といつもの待ち合わせ場所。

雨で周りが見えにくいのが、涼平はまだ来ていないようだ。

靴はぐっしより濡れてしまい、高野豆腐のように一押しすれば水分が溢れ出し、勿論靴下もズボンもびちよびちよで、ギリギリに着ているブレザーが濡れていないかなあ？つてぐらいだ。

傘から染み出した水は髪を濡らし、肩に掛けていた鞆も青色から紺色に変わっていた。

「おい」

「えっ？」

「冷て！！」

「わっ、ごめん」

声に振り返ったときに、傘から雫が飛び散り涼平の顔にかかってしまった。

「ごめん、ごめん」

「まあ、他の方がずぶ濡れだし変わんないけどな」

「確かに」

涼平の靴も高野豆腐になっていた。

歩き出したものの勢いは増すばかりで、川と表現していた道路も湖になりつつある。

雷も鳴りだし、そのたびに金属部分から木の方に持ち手を移動させた。

雨音が酷く、涼平が何か話しているだろうけれど何も聞こえない。涼平も分かかっていて話しているのか、傘から覗く口元が独り言を話しているかのごとく小さく動くのが微かだが見える。

それを見て淋しく感じながら今日学校は本当にあるのか？と不安になった。

「ねえ」

「ねえってば」

聞こえないようだ。

仕方なく伸ばした手で肩を突く。

「今日、学校あるのかな？」

「どうだろうな？」

「ってか無いだろう。周り見てみ、誰も歩いてないぜ」
後ろを振り返ったが誰の姿も見えない。

「本当だ」

「冷たい」

「あつ、ごめん」

また傘から雫が飛び散ったみたいだ。

「タオル予備ある？」

「あるよ」

「学校着いたら貸して」

「辿り着けるかな？」

「目の前には池がある。」

「学校を黙然にして巨大な水溜まりが行く手を阻む。」

「まあー行くけど。」

「僕らは、こんなに頑張つて学校に何しに行くのかな？」

「言葉に出したつもりは無いが、二人で笑ってしまった。」

「俺らアホだな」

「だね」

「そう言いつつもどざどざと僕らは進み続けた。」

第9話：突然は突然に訪れる

学校に着くと生徒用の玄関は開いておらず、隣にある教職員用の玄関が開いていた。

そこから中に入り、高野豆腐を脱ぎ捨て鞆からタオルを出し涼平に渡した。

「どうぞ」

「ん」

廊下に座り込み、ずぶ濡れになった制服を無言で拭き続けた。

誰もいない。

声も何も聞こえない。

耳に届くのは涼平と雨音だけだ。

「休みかな？」

「だろうな」

廊下に座り込んでいる間も誰一人登校して来ない。

脱いだ靴を持って、内履きを取りに行く。

裸足でヒタヒタと冷え切った廊下を歩く。

まだ梅雨には早い大雨に僕は少し浮かれた。

「滅多に無いよね？」

「苦い思い出になるな」

内履きに履き替え、取りあえず教室を目指す。

踵部分を踏み潰し、パスンパスンと抜けるような音を立てて歩く。

一階の保健室前を通り過ぎ、階段を上がる。

二階に着いてすぐあるのが僕のクラスで、涼平のクラスは奥にあった。

「誰も居ないな」

僕のクラス前を通り過ぎ、二階にある全ての教室を見て回ったが、やはり誰も居なかった。

「携帯は？」

鞆から取り出すと着信履歴が十件近く残っていた。

「母さんだ」

電話しなくても分かる内容。

きつと今日は休校なんだろうな。

「もしもし?」

「あんだ、さつさと電話出なさいよね? 何の為の電話なの? 心配するでしょ?」

「はいはい、んで何?」

「言いくいんだけど…」 休校でしょ?

何が言いくいの?

僕はいつもと違う話し方の母親に違和感を感じた。

「何? どうしたの? 何かあった?」

「涼平君のお母さんが交通事故で…、亡くなったの」

「えっ…?」

「涼平君と今一緒に居るんでしょ?」

プーツ、プーツ。

切ってしまった。

どうしよう? 僕が支えてあげなくちゃいけないのに、どうすれば良いのか全然見えて来ない。

「おばさん何だった? やっぱり休校だった?」

涼平の明るい声が胸に刺さる。

後ろに隠した携帯が着信を感じ震えている。

どうやっても上手く伝えれない僕が涼平の支えにならなくちゃいけないのに、僕がすっかりしなきゃいけないのに。

立ってられない。足に力が入らない。泣いてはいけない。

それでも涙はすぐそこまで迫っていた。

「樹？」

涼平の顔が見れない。

黙って俯くことなどしたくないのに…、涙が溢れて来る。どうすれば…、どうすれば良いの？ちゃんと伝えたいのに、全てが良い方向に向かっているとと思ってたのに何で…？ 何でこんなにも涼平を苦しめるの？

「樹どうしたの？ おばさんに何かあった？」

腰が抜けて、廊下に座り込んでしまった。

足がガクガク震え、涙がとめどなく溢れ出る。

喉が張り付き呼吸が上手く出来ない。

廊下にポタポタと涙が落ちる。

「涼…平、涼…平…のおば…おばさんが…事故にあって…
…亡くな…った」

やっと口に出れた言葉。

膝から折れるように脱力し

「そっか」それだけ聞こえた。

座り込み俯いて泣いた。僕の方が大声で、涼平は片手で顔を隠し歯を食いしばるように泣いた。

涼平を苦しめないで、僕はそう願って泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8954c/>

雨粒色

2010年10月24日13時54分発行